

# 省線電車の射撃手

海野十三

青空文庫



帝都二百万の市民の心臓を、一瞬にして掴つかんでしまったという  
 評判のある、この「射撃手しやげきしゆ」事件が、突とつじよ如として新聞の三面  
 記事の王座にのぼった其の日のこと、東京××新聞の若手記者風か  
ざまやそじ間八十児君が、此の事件に関係ありと唯今日をつけている五人の  
 人物を歴訪れきほうして巧みたくに取ってきたメツセージを、その懐中手帳  
ちよつとから鳥渡失敬して並べてみる。

\*

\*

\*

「僕は、探偵小説家の戸浪三四郎となみである。かねがね僕は、原稿紙上の探偵事件ばかりを扱っているのにあきた嫌らず、なにか手頃の事実探偵事件にぶつかってみたいものだと考えていたところ、こんど偶然の機会をつかみ、この『射撃手』事件の捜査のお仲間入りができるようになったのである。……だが僕は、仕事が忙しいうえに、至って面倒くさがり屋だから、事件が起つても、いつも直ぐに駆けつけて犯罪の現場げんじょう調べをやるというような勤勉きんべんな真似ばかりは出来ない。事件に関する僕の知識は大江山おおえやま捜査課長の報告もとづに基もといているものも少くない」（東京郊外、大崎町おおさきちょうの同氏邸にて）

「わたくしはJOAK放送局技術部の笹木光吉ささきこうきちです。このたび

は飛んだことから事件に関係を持つようになりました。と申しますのは、わたくしの邸宅が、事件の犯罪現場に近いところにあつて、そのうえ可なり広い面積エリアを占めているところから、犯人が邸内のどこかを、うろついているんじゃないかとの御疑いから、警視庁のお呼出しを、しばしば蒙こうむるようになったのだそうです。なつたのだそうです、とは妙な申し様ようでございますが、これは大江山捜査課長殿のお話なのですが、わたくしはそれについて半信半疑でいます。それと申しますが、わたくしが科学者であるというのを口実こうじつにして、わたくしには関係のない事柄にまで科学的意見を徴ちやうされたことが、随分と多うございますのです」（上目かみめぐ黒ろの笹木邸内新宅に於て）

「僕は帆村<sup>ほむらそうろうく</sup>荘六です。僕は或る本職を持つている傍<sup>かたわら</sup>、お恥かし<sup>はず</sup>い次第ですが、『素人<sup>しろうと</sup>探偵』をやっています。無論、その筋の公認を得て居りまして、唯今の捜査課長の大江山も、僕を御存知です。こんどの殺人事件は別に依頼をうけたわけではありませんが、始終注意しています。ひよつとすると、事件の成行<sup>なりゆき</sup>次第<sup>しだい</sup>で、第一線に立たなきやならないかも知れません。僕はこの事件に、非常な魅力を感じています」（電話にて）

「あたくしは、赤星<sup>あかほしりゆうこ</sup>龍子と申します。あたくしは、自分自身のことを余り申上げる気が致しません。そのために疑いが深くなつても仕方ありません。こんな事件に、何<sup>な</sup>にも罪のないあたくしみたいなものが引込まれるなんて、あたし一生の不運だと思つ

ていますわ、なんでもいいんです」(東京郊外、渋谷町 鶯しゅやまちうぐいす  
谷だにアパートにて)

「大江山警部。年齢三十七歳。警視庁刑事部捜査課長。在職満十年。今回省線電車内に起りたる殺人事件は、本職を始め警視庁を愚弄ぐろうすることの甚はなはだしきものにして、爾来極力探索の結果、此程漸く犯人の目星を掴つかむことを得たるを以て、遠からず事件解決の搬はこびに至るべし。なお本職を指して米国市俄古べいこくシカゴの悪漢ギャンゲ团长アル・カポーンに買収されたる同市警察署長某氏に比するものあるは憤慨ふんがいを通り越して、そぞろ噴飯ふんぱんを禁じ得ざるなり」(警視庁において、タイプライターでうった原文を手交しゅこう)

\* \* \*

さて「射撃手」事件の、そもそも発端<sup>ほったん</sup>は、次のようだった――

## 2

もう九月も暮れて十月が来ようというのに、其の年はどうしたものか、厳しい炎暑<sup>えんしよ</sup>がいつまでも弛<sup>ゆる</sup>まなかった。「十一年目の気象の大変調ぶり」と中央気象台は、新聞紙へ弁解の記事を寄せたほどだった。復興新市街をもった帝都の昼間は、アスファルト

路面が熱気を一ぱいに吸いこんでは、所々にブクブクと真黒な粘ね液へきぎを噴ふきだし、コンクリートの厚い壁へきたい体は燃えあがるかのようんえきに白熱し、隣りの通とおりにも向いの横よこ丁ちようにも、暑さに脳髓さすがを変かにさせた犠牲者が発生したという騒ぎだった。夜に入ると流石さすがに猛威をふるった炎えん暑しよも次第にうすらぎ、帝都の人々は、ただもうグツタリとして涼りようを求め、睡眠をむさぼった。帝都の外がい郭かくにそつと環かん状じようを描いて走る省線電車は、窓という窓をすつかり開き時速五十キロメートルの涼りよう風ふうを縦じゆう貫かんさせた人フオー工スト冷クー却リで、乗客の居眠りを誘った。どの電車もどの電車も、前後不覚に寝そべった乗客がゴロゴロして、まるで病院電車が馳はしっているような有様だった。そんな折柄、この射撃事件が発生

した。その第一の事件というのが。

時間をいうと、九月二十一日の午後十時半近くのこと、品川方面ゆきの省線電車が新<sup>しんじゆく</sup>宿、代々木<sup>よよぎ</sup>、原<sup>はらじゆく</sup>宿、渋谷<sup>しづや</sup>を経て、エビス駅を発車し次の目黒駅へ向けて、凡<sup>およ</sup>そその中間と思われる地点を、全<sup>フル・スピード</sup>速力<sup>フル・スピード</sup>で疾走していた。この辺を通つたことのある読者諸君はよく御存知であろうが、渋谷とエビスとの賑<sup>にぎ</sup>やかな街の灯も、一步エビス駅を出ると急に淋しくなり、線路の両側にはガランとして人<sup>ひと</sup>気<sup>け</sup>のないエビスビル会社の工場だの、灯<sup>とも</sup>火<sup>しび</sup>も洩<sup>も</sup>れないような静かな少数の小住宅だの、鬱<sup>うつ</sup>蒼<sup>そう</sup>たる林に囲まれた二つ三つの広い邸宅だのがあるきりで、その間<sup>あいだ</sup>間<sup>あいだ</sup>には起伏のある草<sup>くさ</sup>茫<sup>ぼう</sup>々<sup>ぼう</sup>の堤防や、赤土がむき出しになっている大小の崖<sup>がけ</sup>

や、池とも水溜みづたまりともつかぬ濠ほりなどがあつて、電車の窓から首をさしのべてみるまでもなく、真暗で陰気くさい場所だった。この辺を電車が馳はしつているときは、車内の電燈までが、電圧が急に下りでもしたかのように、スーツと薄暗くなる。そのうえに、線路が悪いせいか又は分岐点ぶんきてんだの陸橋りつきょうなどが多いせいか、窓外から噛みつくようなガタンゴーと喧やかましい騒音が入つて来て気味がよろしくない。という地点へ、その省線電車が、さしかかつたのだった。

その電車は六輛連結だったが、前から数えて第四輛目の車内に、みなさんお馴染なじみの探偵小説家戸浪三四郎が乗り合わせていた。もし読者諸君がその車輛に同車していたならきつとおかしく思われ

たに相違そういない。というのは、戸浪三四郎は『新青年』へ随筆を寄稿してこんなことを云った。

「僕は電車に乗ると、なるべく若い婦人の身近くを選んで座を占める。彼女の生なまぐさい体臭や、胸を衝つくような官能的色彩に富んだ衣裳や、その下にムツクリ盛りあがった肢したい態などは、日常吾人ごじんの味あじわうべき最も至廉しれんにして合理的なる若返わかがえり法である」と。そして、成程なるほど戸浪三四郎の向いには、桃色のワンピースに、はちきれるようにふくらんだ真白な二の腕も露あらわな十七八歳の美少女が居て、窓枠に白いベレ帽の頭を凭もたせかけ、弾力のある紅い口唇くちびるを軽くひらいて眠っていた。それから戸浪三四郎の隣りには、これはなんと水々しく結ゆいあげた桃割ももわれに、紫紺しこんと水色のすがすが

しい大柄の紹縮緬ろちりめんの着物たんこうしよくに淡黄色たんこうしよくの夏帯をしめた二十歳はたちを二つ三つ踏みこえたかと思われる純日本趣味の美女がいた。車内にチラホラ目を覚さましている組の連中は、この二人の美しい対照に、さり気ない視線をこつそり送っては欠伸あくびを噛みころしていたのだ。  
 った。

車輪が分岐点ぶんきてんと噛み合っているらしくガタンガタンと騒そうぞう々しい音をたてたのと、車輛近くに陸橋のマツシヴな橋桁はしげたがグオーツと擦れちがったのが同時だった。乗客は前後にブルブルツと揺ゆられたのを感じた。その躁音そうおんと激動に乗せられたかのように、例のワンピースの美少女の身体が前方へ、ツツツと滑すべった。両膝をもろに床の上にドサリとつくくと、ブラリと下った二本の裸

腕で支えようともせず、上体をクルリと右へ振ると、そのままパツタリ、電車の床にうつ伏せぶになって倒れた。

車内の人々は、少女が居眠りから本眠りとなり、うつかり打うちこ転ろがったのだったと思つた。乗客たちは、洋装のまくれあがつたあたりから覗のぞいている真白のズロースや、恐いほど真白な太股の一部に灼やけつくような視線を送りながら、今この少女が起きあがつて、どのような魅力のある羞しゆう恥うちをあらわすことだろうか、期待をいだいた。だが、一同の期待を裏切つて、少女はなかなか起き上ろうとしなかった。ピクリとも動かなかつた。

「様子がヘンじゃありませんか、皆さん！」

そう云つて立ち上つたのは、商しょう人にん体ていの四十近くの男だつた。

一座は俄かにザワめいて、ドヤドヤと少女の周囲に馳けよつた。

「早く起してやり給え」

こう云つたのは、探偵小説家戸浪三四郎のうわずつた声音だつた。

「モシモシ、娘さん」と甲斐甲斐しく進みでた商人体の男は、少女の肩を、つつついた。無論、少女はなんの応答もしなかつた。さらばと云うので、彼氏は右手を少女の肩に、それから左手をしただから少女の胸に差入れて、グツと抱え起した。少女の頭はガクリと胸に垂れ下つた。ヌルリと滑つた少女の胸部だつた。

「呀ッ」抱きおこした少女を前から覗いた男が、顔色をかえて、背後の人の胸倉に縫りついた。

「血だ。血——血、血、血ッ」その隣りの男が、気が変になつたように声を震ふるわせて叫んだ。

「ヒエツ！」商人体の男は吃驚びっくりぎようてん仰天して、前後の考えもなく、少女の身体をその場にドサリと抛ほうり出した。

戸浪三四郎がこれに代つて進み出ると、少女の身体をソツと上向きに寝かせた。人々の前に、少女の美しい死し顔がが始めてハツキリと現れたのだった。左胸部を中心に、衣服はベツトリ鮮せん血けつに染つていた。その上、床の上に二尺四方ほどを、真紅まっかに彩いろどつているところを見ると、出血は極めて瞬間的に多量だったものと見える。

「車掌君はいないか。駄目らしいが、一応早く医者に見せなくち

やいけない」

そこへ車掌が来た。

「皆さん、あとずっと後へ寄って下さい。電車は只今、全速力で次の駅へ急がせていますから……」

言葉の終るか、終らないうちに、電車は悲鳴に似たような非常警笛をならして、目黒駅の構内に突入して行った。電車が停車しない前に、専務車掌の倉内銀次郎はヒラリとプラットホームに飛び降り、駅長室に馳けこむなり、医者と警視庁とに電話をかけた。その間に電車は停り、美少女の倒れた第四輛目の乗客は全部、外に追いだされた。

## 3

駆けつけた附近の医者ほどこは、電車の床ゆかの上にころが転った美少女に対して、すべ施すべき何の策をもたなかつた。というのは、彼女の心臓の上部が、一発の弾丸によつて、美事射みごとちぬかれていたから。弾丸は左背部の肋骨にひつかかつているらしく、裸にしてみた少女の背中には弾丸の射しゃし出口ゆつぐちが見当らなかつた。「銃丸じゅうがんによる心臓貫通——無論、即死そくし」と医者は断定した。

惨死ざんしたい体たいを乗せた電車は、そのまま回避線かいひせんへひつぱり込まれ、

警視庁からは大江山捜査課長一行が到着し、検事局からは雁かりがね金  
検事の顔も見え、係官の揃うのを待ち、電車をそのまま調しらべ室  
にして取調べが始まった。

大江山警部は、やや青ざめた神経質らしい顔面を、ピクリと動  
かして、専務車掌の倉内銀次郎を招いた。

「倉内君、君に判っている一と通りを話してきかせ給え」

「ハア、それはこうなんです」と彼は、係官の前の小机こづくえの上に、  
線路図や、電車内の見取図を拡ひろげて、彼が乗客の注意で、殺人の  
現場にかけつけてのちに見た事柄や、乗客から聞いたそれ以前の  
話など、既に読者諸君が御存知の事実を述べた。

「君は、事件の起ったときに、どの位置に居たかネ」大江山警部

は訊問しんもんした。

「ハツ、やはりあの第四輛目に居りましたが、車掌室が別になつてゐるもんで、早く気がつきませんでした」

「君は車掌室のどの辺に居たか」

「右側の窓のところに頭部を当てて立つて居りました」

「事件の前後と思われるころ、何かピストルらしい音響をきかなかつたか」

「電車の音が騒そうぞう々しいもので聞きとれませんでした」

「君は窓外の暗闇やみに何かパツと光つたものを認めなかつたかい」

「ハツそれは……別に」

「君の位置から車内が見えていたか」

「見えていません。カーテンが降りていましたから……」

「車内へ入ってから、銃器から出た煙のようなものは漂ただよっていたか」

「御座いませんでした」

「車内の乗客は何人位で、男女の別はどうだった」

「サア、三十名位だったと思います。婦人乗客が四五人で、あとは男と子供とでした」

「その車の定員は？」

「百二名です」

「これは参考のために答えて貰いたいのだが、あの際、銃丸は車内で発射されたものか、それとも車外から射ちこんだものか、何いず

れであると思うかね、君は」

大江山警部が、少女の射ち殺された頃の事情を一向弁えぬ専務車掌に、こんなことを聞くのは、愚問の外のなにものでもないと思われた。

「車内で射つたんでしようと思います」

専務車掌の倉内は、警部の愚問に匹敵するような愚答を臆面もなくスラリと述べた。

「じゃ君は何故、あの車輛に居た乗客を拘束して置かなかつたのか」

「……ただいま今になってそう気が付いたもんですから」

「そう思う根拠は、なにかね」

「別に根拠はありませんが、そんな気がするんです」

「それでは仕方がないね。なんだったら、ここに居られるあの時の乗客有志を一時退場ねがった上で、君の考えをのべて貰ってよ  
いが……」

車内に居た乗客の多くは、事件にかかわりあい係合いになるのを厭いやがったものと見え、死人電車が目黒駅のプラットフォームに着くと、バラバラ散らばってしまい、このところまで随ついてきたのは僅か二人だった。その一人は、左手を少女の血潮で真赤に染めた商人てい体の四十男で、もう一人は探偵小説家の戸浪三四郎だった。

「ばば馬鹿を言っちゃいかん」と其の商人体の男が、たまり兼ねて口を差入れた。「いま聞いてりや、車内の者が射つたというこ

とだが君が出て来たのは随分経つてからじゃないか。そんなに後おくれ走ばせに出てきて何が判るものか。第一、あたしはあの車内に居たが、ピストルの音をきかなかつた。ね、あなたも聞かなかつたでしょう」と戸浪三四郎の方を振りかえつた。

戸浪は黙つて軽く肯うなずいた。

「ほら御覧なせえ、鉄砲弾だまは窓の外から飛んできたのに違ちげえねえ。あまり根も葉もないことを言つて貰てめえいたかねえや。手前てめえの間抜けから起つて、多おおせ勢いの中からコチトラ二人だけがこうして引張られ、おまけに人殺しだアと証言するなんて、ふぎけやがつて……」

「これ林三平さん、静かにしないか」と、車掌に喰つてかかろう

とする商人体の男を止めたのは、大江山警部だった。「戸浪三四郎さんから何か別な陳述ちんじゆつうけたまわを承りたいですが」

「僕はすこし意見を持っています。先刻せんこく申しあげたように探偵小説家という立場から僕は申すので、或いは実際と大いに違っているかも知れません。僕は殺された美少女、——いちみや宮かおるさんと云いましたかね、かおるさんの直ぐ向いに居たのですが、確かにピストルの爆音を耳にしませんでした。ですが、ちよつと耳に残る鈍にぶい音をきいたんです。さよですなア、空気をシュツと切るような音です。きわめて鈍い、そして微かすかな音でした。これはどうやら右の耳できいたのです。右の耳というと、電車の進行方面の側の耳です。その行手には、倉内君の居られた車掌室があり

ます。またその右の耳のある隣りには二尺ほど離れて、日本髪の婦人が腰をかけて居りました。そんなことから思い合わせると、弾丸は僕の身体より右側の方からとんで来たと思われます。林さんは僕よりずっと左手に居られたので関係はないようです。車内で射つたとすれば、私も嫌疑者の一人でしょうが、僕より右手にいた連中も同時にうたがってみるべきでしょう。日本髪の婦人は勿論のこと、失礼ながら倉内車掌君も同類項です」

「すると貴方は、車内説の方ですか」と大江山警部が尋ねた。

「いえ、寧ろ僕は車外説をとります。弾丸は車外から射ちこまれ、例の日本髪の婦人と僕との間をすりぬけて、正面に居た一宮おるさんの胸板を貫いたのです。シュツという音は、銃丸が

僕の右の耳を掠めるときに聞こえたんだと思います」

「もう外に聞かしていただくことはありませんか」

「現場に居た人間としては、もう別ありません。老婆心に申上げたことは、あの現場附近を広く探すことですな。もしあの場合銃丸たまが乗客にあたらなかったとしたら、銃丸は窓外へ飛び出すだろうと思うんです。いや、そんな銃丸が既に沢山落ちているかもしれません。そんなものから犯人の手懸りが出ないかしらと思います。屍体したいもよく検しらべたいのですが、何か異変がありませんでしたか」

「いや、ありがとう御座いました」と警部は戸浪三四郎の質問には答えないで、彼の労を犒ねぎらった。

## 4

大江山捜査課長は、警視庁の一室で唯ひとり、「省線電車射撃事件」について、想念を纏めようと努力していた。

戸浪三四郎が「一宮かおるの屍体に異常はないか」と聞いたのは炯眼だった。屍体の纏っていた衣服の左ポケットに、おかしな小布が入っていた。それは丁度シャツの襟下に縫いつけてある製造者の商標に似て、大きさは三センチ四方の青い小布

で、中央に白い十字架を浮かし、その十字架の上に重ねて赤い糸で、横向きの髑髏どくろの縫いがあった。

この髑髏こぬのの小布はなにを示すものなのだろう。

お守りなのであろうか、と考えた。あまりに平凡である。

不凶ふと思いついたことは、これはある不良少女団のだんいんしょう団員章で

はないか、と。殺された一宮かおるは、××女学校の校長の愛まなむ

娘すめだったのであるが、教育家の家庭から不良児の出るのは、珍

らしいことではない。かおるは不良少女であったが、仲間の掟おきてを

破つたために殺された、と見てはどうであろう。

大江山警部は給仕を呼んで、不良少女調簿しらべをもつてこさせる

と丹念にブラック・リストの隅から隅まで探しまわったが、かお

るの名前も、その怪しげな徽章きしやうも見つからなかった。そうすると、未検拳の不良団なのであろうか。

このように考えてくると、銃丸たまたまは車内でぶつばなされたと考えるのが、本道ほんどうである。だが車内でズドンという音を聞いたものがないではないか。それなら消音しょうおんピストルを用いたものと考えてはどうか。

だが乗客の多くは逃げてしまった。商人と称する林三平と、小説家の戸浪三四郎とを疑うのは最後のことである。車掌の倉内は、たった一人で車掌室しゃしょうしつに居ただけに、すこし弁明がはつきりしない。答弁にすこしインチキ臭いところが無いでもない。彼はピストルの音をきかなかったという。騒音そうおんに慣れた彼が、ピスト

ルの音をきかなかつたというのであるからそれは本当であろう。

ところが刑事が出かけて、現場附近の住民に聞き正したところによると、当日夜の十時と十一時との間に爆音をきいたという人間が三人ばかり現れた。そのうちの一人は、げんじょう現場に割合近い踏切の番人だったが、丘陵にひびくほど相当大きい音だったという。但し発砲の音というよりも、自動車がパンクしたような音に近かつたという。これは帝都全市のタクシーや家用自動車につき調査中であるから、二三日のうちに判明するであろう。

もしそれが発砲の音だったら、車掌の耳はどうかしていたことになりはしまいか。電車の騒音は、車内よりもむしろ車外の方が大きいのだから。専務車掌室の扉ドアを細目にひらいて、消音ピスト

ルを打つたと考えてはどうであるか。それでは銃丸は、かおるの  
 左胸を側面から射つことになる。然るに彼女の弾丸による創  
 管は、ほんの少し左へ傾いているが、ほとんど正面から真直  
 に入っている。これは違う。それでは、電車の進行中、彼は窓か  
 ら屋根によじ昇り、屋上の欄干に足を入れて真逆にぶら下  
 ると丁度、顔が窓の上枠のところにとどくから、そのまま蝠  
 蝠式にぶら下って消音ピストルをうち放つ。それがすむと、何  
 喰ぬ顔をして車掌室にかえり、室内の騒ぎを始めて知ったよう  
 な風を装って馳けつける。うん、こいつは出来ないことじゃない。  
 車掌倉内銀次郎の身辺をすこし洗ってみよう。

「コツ、コツ！」と扉を叩く者がある。

「よろしい」大江山警部は、扉の方を向いた。扉がスウと開いた。入って来たのは、給仕だった。

「速達でございます」そう云って給仕は、課長の机きじょう上に、茶色の大きい包紙のかかっている四角い包を置いて、出て行った。

警部は、注意して包をひらいてみた。中には、「ラジオの日本」という雑誌の昭和五年十二月号が一冊入っているきりだった。それを取上げてペラペラと頁ページをめくってみると、半頃なかごろに頁ページを折つてあるところがあつた。そこを開けると、白い小布こぬのが葉しおりのように挿はさまつていて、矢印が書いてある。矢印の示すところには赤鉛筆で、傍線ぼうせんのついている記事があつた。表題は、「無線と雑音の研究」とあり、「大磯おおいそHS生い」という人が書いていたのだつた。

大江山警部にとって、無線の記事は一向ありがたくなかった。彼は雑誌を抛りだそうと思つたが、「雑音」という文字が、電車の騒音と関係がありはしまいかと思つて、兎に角、ぽつりぽつりと読みはじめた。直ぐに彼は、見当ちがひだつたことに気がついたけれども、その記事は、思つたよりも平易である上に、その内容は大江山警部の注意を喚起するのに充分だつた。

「無線と雑音の研究」を思ひつたHS生は、東海道線大磯駅から程とおからぬ山手に住んでいる人だつた。彼の家にはラジオ受信機があつたが、ラジオを聴いていると、それが聴きとれないほどのガリガリツという大きな雑音が、一日にうちに数十回入ってくるのだつた。彼はラジオに雑音の起る時刻を測つてみたところ、

それは毎日きまつた時刻にガリガリツと鳴ることを発見した。それから、探求たんきゆうを進めてゆくと、雑音の原因は、家の前を通る列車の電気機関車が、架空線かくうせんに接触するところで、小さい火花を生ずるため、殊ことに大きい雑音は、架空線の継ぎ目つめのところで起ることが判つた。その結果、受信機で雑音を数えながら、時計をみていると、列車が毎時幾キロメートルの速度スピードで走っているか、又列車はどの地点を走っているかが、家の中に居ながらして、手にとるように判るといふのである。HS生は、大磯附近の地図や雑音の大きさを示す曲線図を沢山挿入そうにゆうして、これを説明してあつた。

「こりや面白い発見だ」と大江山警部は、思わずひとりごと独言を言つ

た。「だが、この記事が、なにになるといふんだ」

なにか省線電車射撃事件に関係があるようであり、さアそれはどういう関係だと聞かれると、説明ができなかった。ただ漠然ぼくぜんたる一致が感じられるばかりだった。警部は、それを、自分の科学知識不足に帰きして、ちよつと忌いまい々ましく感じたのだ。それにしても、一体誰がこの雑誌を送つてよこしたのだ。

また扉ドアを叩くものがあつた。部下の多田刑事であることは開けてみるまでもないことだった。応おうと答えると、果して多田刑事が入つてきた。彼の喜びに輝いている顔色はなにごとかを発見してきたのに違ちがひない。

「課長！　とうとう面白いものを見付けてきました。これです」

多田は、そう云つて、小さい紙包を、大江山警部の前に置いた。警部は、それを手にとつて開いてみると、二個の薬やつきょう莢だつだつた。

「ほほう、これはどこにあつた」

「現場附近の笹木邸ささぎていの堀へいの下です」

「待て待て、これが弾丸だんがんに合うかどうか」と警部はやおら立つて傍かたわらの硝子函ガラスばこから弾丸をつまみ出すと薬莢やくきょうに合せてみた。果然ぜん、二つはピタリと合つて、一つのものになつた。警部が硝子函からとり出したのは、殺された一宮かおるの体内から抜きとつた弾丸だったので、多田刑事の拾つてきたのは、紛れまぎもなく、その弾丸を打ち出した薬莢やくきょうにちがいないと思われる。薬莢やくきょうが二個で、

弾丸は一個——そこに謎がないでもなかったが。

「お手柄だ。そして笹木邸をあたって見たかい、多田君」

「早手廻しはやてまわしに、若主人の笹木光吉こうきちというのを同道どうどうして参り

ました。ここに大体の聞書ききがきを作つて置きました」

そう云つて、多田刑事は、小さい紙片しへんを手渡した。警部は獣けものの

ように低く呻りうなつつ、多田の聞書というのを讀んだ。「よし、会

おう」

案内されて、室へ静かに姿をあらわした笹木光吉は、三十に近い青年紳士だった。色は黒い方だったが、ブルジョアの息子らしく、上品ですこし我が強がいらしいところがあつた。

「飛んだ御迷惑をかけまして」と大江山警部の口調は丁重ていちようを

極めていた。「実は部下のものが、こんなものを（と、二個の葉莖と一個の弾丸を示しながら）拾って参りましたが、葉莖の方はお邸の塀下に落ちて居り、弾丸は、ここに地図がありますが、線路を越してお邸の向い側にあたる草叢から拾い出したのです。お心あたりはございませんか」

そう云つて刑事は、白い西洋紙の上に、三品をのせて差し出した。多田刑事は、課長の出鱈目に呆れながら、青年の顔色を窺つた。

「一向に存じません」と笹木はアツサリ答えた。「指紋が御入用なら、遠慮なく本式におとり下さい」

大江山警部は、笑いに、赭い顔を紛らせながら、白い西洋紙を

ソツと手許へひっばったのだった。

「九月二十一日の午後十時半には、どこにおいででしたか、承りたい」

「家に居ましたが、もう寝ていました。私はラジオがすむと、直ぐ寝ることにして居りますから……」

「おひとりでおやすみですか」

「ええ、どうしてです。私のベッドに、ひとり寝ます。妻は、まだありません」

「誰か、当夜ベッドに寝ていられてのを証明する人がありますか」  
「ありますまい」

「十時半頃、何か銃声みたいなものをお聞きになりませんでした」

か」

「いいえ。寝ていましたので」

「御商売は？」

「JOAKの技術部に勤めています」

「JOAK！ アノ放送局の技師ですか」大江山警部の顔面がんめんきん  
筋肉にくがピクリと動いた。

「そうです、どうかしましたか」

「『ラジオの日本』という雑誌を御存知ですか」

「無論知っています」

「貴方のお名前は光吉ひかりきちですか」

「光吉こうきちです」

「大磯に別荘をお持ちですかな」

「いいえ」

「だれかに恨みうらをうけていらつしやいませんか」

「いいえ、ちつとも」

「邸内に悪漢が忍び入ったような形跡けいせきはなかつたですか」

「一向にききません」

大江山警部は、さっぱり当りのない愚問ぐもんに、自ら嫌気いやけがさして、  
鳥渡ちよつと押し黙った。

「省線電車の殺人犯人は、まだ見当がつかないのですか」と反対  
に笹木光吉が口を切った。

「まだつきません」と警部は、ウツカリ返事をしてしまった。

「銃丸は車内で射ったものですか、それとも車外から射ちこんだものなんですか」

「……」警部はむずかしい顔をしただけだった。

「銃丸を身体の中へ打ちこんだ角度が判ると、どの方角から発射したかが識れるんですが、御存知ですか。殺されたお嬢さんは、心臓の真上を殆んど正面からうたれたそうですが、正確にいうとどの位の角度だけ傾いていましたかしら」

「さあ、それは……」警部はギクリとした。彼は屍体に喰い込んだ弾丸の入射角を正確に測ろうなどとは毛頭考えたことがなかった。「それは面白い方法ですね」

「面白いですよ、いいですか、これが電車です。電車の速度をベ

クトルで書くと、こうなります、弾丸の速度はこうです……」と  
笹木光吉は、三角定規じょうぎを組合わしたような線を、紙の上に引い  
てみせて、「これが弾丸だんがんの入射角にゅうしゃかくです。分解するとどの方向  
からとんで来たか、直ぐ出ます、やってごらんなさい」

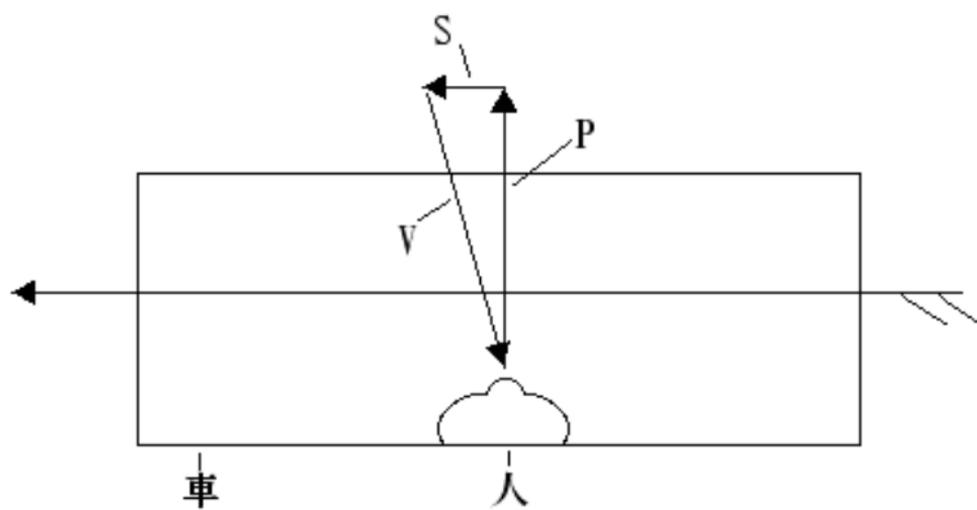
「あとからやってみましょう」

と警部は礼を言った。

「射られたとき、お嬢さんの身体はすこし右に倒れかかっていた  
そうですね」

「ほう、それをどうして御存知です」警部は驚愕きょうがくを強しいて隠  
そうと努力するのだった。

「あの晩、邸へ遊びに来た親類の女が云っていました。殺された



お嬢さんの直ぐ前に居たのだそうです」

「ああ、それでは若しや日本髪にほんがみの……」

「その通りです」

「その御婦人はどこに住んでいらつしやいます」

「渋谷しげやの鶯谷うぐいすだにアパート」

「お名前は？」

「赤星あかほし龍子りゆうこ」

大江山警部は、夜に入つても、捜査課長室から動き出そうとしなかつた。事件に關係のありそうな「謎」は後から後へと山積さんせきしたものの、これ等を解くべき「鍵」キらしいものは一向に見当らないのだつた。

この上は恥はじを忍び、あえて満都まんとの嘲ちやうしやう笑しょうに耐えて、しつかりした推理の足場を組みたてて事件の真相を掴つかまなければならぬ。警部はその第一着として、笹木光吉の残して行つてくれた弾丸の飛来方向ひらいほうこうの計算にとりかかつた。

改めて電話で、法医学教室へかおるの創管そうかんの角度は正確なところ、幾度となつてゐるかを問いあわしたり、鉄道局を呼び出して、

エビス目黒間に於ける電車の速度変化を訊ねたりして、数字を知ると、懸命に数式を解いた。なるほど、弾丸の飛来方向がちゃんと出て来たので現場を中心として、鉛筆でその方向に長々と直線をひっぱった。それは線路に、ほとんど九十度をなして交る方向だった。そして、なんとその弾丸線は、笹木邸の北隅きたすみを貫いていたのである。しかも弾丸線のぶつかつた塀の下こそは、部下の多田刑事が、薬莖をひろつてきた地点きんきんだつたではないか。その地点から、電車の窓までの最短距離は僅々きんきん五十メートルしかなかつたのだつた。小さなピストルでも、容易に偉力いりよくを發揮できるほどの近さだつた。

それにしても、みすみす自分の邸が疑惑まよの的になると知りなが

ら、この計算法を教えていった笹木光吉の真意というものが、警部にはサツパリ解らなかつた。彼は、課長室の椅子にふんぞり反かえつて、大きい頭をいくたびとなく振つてみたものの、笹木の好意と悪意とが互いに相あいなか半ばして考えられるほかなかつたのだつた。ジリジリと喧やかましく課長室の卓上電話が鳴つたのは、このときだつた。

「課長どのですか」そういう声は、多田刑事だつた。

「そうだ、多田君どうした」

「あの赤星龍子を渋谷からつけて、品川行の電車にのりました。

八時半でした。すると、私と赤星龍子の乗っていた車輛に、また殺人事件がおこりました」

「なに、人が殺された。銃じゆうそう創そうかい」

「そうです。若い婦人、二ツ木兼子ふたぎかねこという名前らしいです。弾丸のあたったのは、矢張り心臓の真上です」

「よし、直ぐゆく。乗客は禁きんそく足しといたろうな」

「それが皆、出ちまったのです。あまり早く駅についたものから……」

「馬鹿！」

大江山捜査課長はカンカンに怒って、四十哩マイルで自動車を飛ばして、待避線たいひせんに收容された死人電車にとびこんでいった。

「課長、こつちに殺されています」と悄気しよげかえった多田刑事が案内した。

「龍子はどうした」

「目黒で降りたようです」

「屍体なんか、どうでもよいから、今度からは龍子を其の場でとりおさえるんだぞ」

「課長、例の十字架に髑髏どくろの標章ひょうしょうの入った小布こぬのが、死体の袂たもとの中から出てきました」

第二の犠牲者二ツ木兼子は二十歳あまりの和服すがたの丸ぼちや美人だった。

「弾丸は、この窓から、とんで入ったらしいです」

「地点はどうかッ！」

「昨日の一宮かおるの場合と全く同じなんです」

「ううむ」警部は呻うなった。

「専務車掌は倉内銀次郎か、どうか」

「違います。倉内は今日非番で、出てこないそうです」

そう言っているところへ、赤と金との筋の入った帽子を被かぶつた助役じょやくが、真蒼まつさおになつて、とびこんできた。

「警視庁の方、ももも申し上げます」

「どうしたかッ」大江山警部は、ギョツとふりかえつて、一いっ喝かつした。

「唯今、プラットホームへ入つて来た上のほり電車で、乗客がまた一名射殺されました」

「なに、又殺されたッ、女か男か」

「奥様風の二十四五になる婦人です」

「上り電車の窓は皆締めるよう、エビス駅長へ警告しろッ」

「ハッ、でもこの暑さでは……」

「しつかりしろ、暑さよりも生命じゃないか、助役君」

待避線たいひせんにはガラ空き電車あが二組も窮きゆうくつ 屈くつそうにつながった。

駅は上を下への大騒ぎだった。駅員はもとより、しつかりしていなければならぬ警官たちまでが、常識を喪うしなったかのように、意味なく騒ぎまわった。捜査課長大江山警部だけは、眼を真紅まっかに充血どなさせて唖鳴どなりちらしてはいるものの、一番冷静だった。

第三の犠牲者は三浦糸子と云った。可かなり上背うわせいのある婦人で、クツシヨンのように軟やわらかくて弾力のある肉付の所有者だった。銃丸

は心臓の丁度真上にあたる部分を射つて、だいどうみやく大動脈を破壊してしまつたものらしい。第一、第二の犠牲者に比して創口きずぐちはすこし上方にのぼっているのだつた。三人の犠牲者は、いずれも左側の座席に腰を下ろしていたことが判つた。そのうゑ弾丸の射ちこまれた地点までが、物差で測はかつたようにピタリと一致していた。大江山警部の頭には、線路を距へだてて、真暗な林かこまに困れ立つ笹木邸の洋館が浮びあがつてくるのを、払はらいのけることができなかつた。警部は数名の刑事を手許てもとによんで、一人一人に秘密の命令を耳打ちした。駅員には、上り電車がプラットホームに到着しても、車内に異いじよう状を認めない上でないと、乗客出入口の扉ドアを開いてはならないと命令した。

そのあとで警部は、今しがた第三の犠牲者のハンドバックから見付けてきた例の十字架に髑髏どくろの標章マークを、車内の明るい燈とも火しびの下で、注意深く調べた。前の二枚の標章マークと合あわせてこれで三枚になったのだった。警部の面おもてには困こん惑わくの色がアリアリと現れた。グツとその小布こぬのを掌てのうちに握りしめると、警部は、車外に出てザクリと砂利じやりを踏んだ。

(おお呪のろいの標章マークよ)

警部は心の中でそう云つて「ううむ」と呻うなり声ごえをあげた。それを持つている人間ばかりが、どうして射殺されるのだろう。

窓外そうがいから弾丸を射ちこんだとすれば、その犯人は、なんという射撃の名人だろうか。呪のろいの標章マークを贈ったその人間を覗ねらうこと

正確に、しかもその心臓を美事みごとに射ち貫くつらぬことは、実に容易ならぬ技量である。だがこの悪意ある射撃は、世紀末的な廃はい顔たいせる現代おいに於て、なんと似合わしいデカダン・スポーツではあるまいか。

小暗こくらいレールを踏み越えて、ヒラリとプラットホームに飛びあがった大江山警部の鼻先に、又ツクリ突立つったった男があつた。

「大江山さん、豪えらいことになりましたね」

「おお、貴方は、探偵小説家の戸浪三四郎さんでしたな」と警部は云つた。戸浪は洗いざらしの浴衣姿ゆかたすがたというだらしの無い風ふうをしていたのだつた。警部は戸浪三四郎が、第一の射殺事件のときに指摘してくれたヒントが、唯今になつて否定することのできな

い明確な事実を生んでいのに、思いあたった（この探偵小説家の名論が聞けるものなら）。——それは溺れる者がつかむという藁<sup>わら</sup>以上のものであると、警部はみずからの心に弁解をして置いて口を開いた。「どうして、これへ来られましたな」

「これごらんなさい」そう云って彼の差出したのは、しよごう初号活字の大きい見出しのついた東京××新聞の号外だった。

### 省線電車に

大胆不敵な射撃手現わる

前夜と同一犯人か

とあり、今夜の二ツ木兼子射殺事件がデカデカに報道された。間もなく第三の三浦糸子射殺事件が更に大々の活字で報道されるのかと思うと、警部の<sup>じてい</sup>耳底に、新聞社の輪転機の轟々たる響がにわかに関こえてくるようだった。

「射撃手——だって、新聞は云つてますぜ。これで三人ですね」  
「若い女性ばかりを<sup>ねら</sup>覗う痴漢射撃手です」と警部は、ムツとして思わぬことを言い放った。「ときに貴方はエロ探偵小説もお得意のようでしたな。ハツハツ」

「冗談云っちゃいけません、大江山さん、貴方は隠しておいでのようなのですが、省線電車の射撃手は地獄ゆきの<sup>マーク</sup>標章を<sup>く</sup>呉れておいて殺すというじゃありませんか。三人の犠牲者はどこの人で、どこ

を通つてきたのかを調べると三人に共通なもののあるのが発見されると思いますよ。そいつをひっばつてゆくと、十字架と髑髏どくろの秘密結社が出てくるんじゃないですか」

「秘密結社ですつて？」

「そりゃ僕の想像ですよ」

戸浪三四郎は呪いの標章マークについてもつと何かを知っているのだと、警部は悟さとつた。小説家にも尾行をつけることだ。「探偵小説家は実際の犯罪をしない。それは、いつもペンを走らせて犯罪を妄想もうそうしているから、犯罪興奮力が鈍にぶつているのだ」と云つた人があるが果してそうだろうか。

「だが戸浪さん。犯人を解く謎は、そればかりではなく、沢山たくさん

あるのですよ」

「謎がそう沢山あると思うのは、大間違いです」と戸浪はけいべつ軽蔑の口調をあらわして云った。「僕は案外単純な事件だと思うが：

…」

「戸浪さん、貴方は弾丸が車内で射たれたか又は車外から射ちこんだか、どっちと考えていますか」

「それですよ、大江山さん。僕は昨日その質問をうけたとき、車外説をもち出しました。今夜の殺人の話をきいてみますと、三人が三人とも同じ地点で、同じ右側にかけた人が、同じく心臓を射たれたそうですね。それは車内で射ったとしてもあり得ることですが、その正確なる射撃ぶりから推おして、何か車外の地点に、非

常に正確な銃器を据えつけて、機械的に的を覗つたのだと考えた方が、面白くありませんか」

「すると、どんな機械なんでしょう」

「僕もよくは知りませんが、四・五センチの口径をもつたピストルなんて、市場にはちよつと見当らない品です」

「ほほう、よく口径を御存知ですね」

「法医学教室にいる友人に聞いたのです。それで犯人は特殊な科学知識をもっていて、恐るべき武器を持っていると考えるのです。ピストルを消音にすること位は、わけはありません。発砲の火を隠すためには、相当長い管をつかっただ、先に弾丸の出る小さい穴をあけとけばよろしい。専務車掌が窓外に火を見なかったという

のも、こんな仕掛けをすれば説明がつきます。あとは、電気を使つて発砲させることもできるでしょう」

「わかります！」と警部は、探偵小説家の途方もない想像力で煙けむにまかれながら、合あいづち槌をうった。

「射撃手が跳ちやうりよう梁するのは、三人が三人とも申し合わせたように夜間に限るのはどうしたものでしょう。いいですか、これは面白い問題です。車内に殺人鬼さつじんきがいるのだったら、なにも夜分を選ばなくても、真昼間だって割合空すいた電車があるでしょうから、射ちたくなる筈です。それがなくて夜に限るといふのは、この精巧な器械を、或る地点に据えつける必要があるからなんです。器械や、犯人の姿を見られては困るからです」

大江山警部は、例の癖くせをだして獣けもののように呻うなっていた。その一方に、探偵小説家というものは、こんなにまで科学的でなければ勤つとまらないものかと、或る種の疑惑が湧いてこないでもないのだつた。

「貴方はよくお調べですね」と警部が皮肉ひにくのつもりで云った。

「貴方が見逃しているところを拾って、事件を早く解決したいのです。僕も容疑者の一人だそうですからね。ハッハッ」

刑事が一人、馳かけてきた。

「課長どの、総監閣下のお電話です」

「ナニ総監の……」警部は渋じゆうめん面めんを作った。

「お気の毒ですなあ」と戸浪が彼の背中をポンと叩いた。

総監は果して非常に不機嫌だった。大江山捜査課長は油汗あぶらあせを拭ぬぐう暇いとまもなく、水を浴びたような顔をして、縷る々と陳述ちんじゆつした。

「君は、目黒の笹木光吉の情婦じようふである赤星龍子が本郷ほんごうの小柴こし木病院ばぎで毎日耳の治療をうけているのを知っているか」と総監が突然言った。

「いや、存じませんが……」警部は耳の治療どころか、龍子が笹木の愛人であることも聞くのが始めてだった。

「そんなんじや困るね、君は」と総監のつっぱなすような声が受話器の中に反響した。「それから、戸浪三四郎が元浜松高等工業学校の電気科の先生をしていたことを知ってるか」

「ううウ」と警部は電話機に獅<sup>し</sup>噛<sup>が</sup>みついで呻<sup>うな</sup>った。「そそそれも存じませんが……」

「……」総監は無言だった。総監も呻っているのである。

「総監閣下、失礼ですが、誰がそんなことを申しましたか」

「帆村<sup>ほむら</sup>荘六氏<sup>そうろく</sup>じゃ、私立探偵の。いま私の邸に見えて居られる」

帆村荘六といえば、警部は知らぬ人でもなかった。まだ経歴の若い素人探偵だったが、モダンな科学探偵術をチョコチョコふりまわし、事件を不思議な手で解決するので、少し評判が出てきた人だった。

「君が必要なとき、いつでも応援をして下さるそうだ。今、お願いしておこうか」

「いえ、それには及びません」大江山捜査課長は、泣きだしたいような気持をこらえて、断然だんぜん拒絶きよぜつした。

## 6

大江山警部は電話をガチャリと切ると、しばし其の場に立ちすくんだ。考えてみるまでもなく、彼の立場はたいへん不運だった。彼は今度の事件で、どうしたものか、犯人の目星を一向につけることができなかった。昨日今日の事件ではあるが、林三平、倉内

銀次郎、戸浪三四郎、赤星龍子、笹木光吉と疑いたい者ばかり多くいせに、犯人らしい人物を指すことができないのだった。唯今の総監の言葉から思いついたことは、電氣の先生だった戸浪が相そうとうたのも

当頼母べんぎしい探索をしていくから、彼と同盟すれば、大いに便宜べんぎが得られるであろうという見込みだが、但し戸浪自身が犯人の場合は全く失敗になるわけだった。戸浪に会って気をひいた上で決定しようと考えた。赤星龍子が笹木の愛人であるのは驚いたが、前後二回も、殺人のあつた電車にのつていたのは、一寸ちよつと偶然とは考えられない。実は先刻部下に命じて置いた龍子の動どうせ静せい報告がきた上で、もすこし詳くわしく考えてみたい。……

大江山警部は電話のある室を出て、階段をプラットホームに下

りながら、懐中時計を出してみた。もう夜も大分更だいぶんけて、ちょうど十時半になっていた。昨日の今頃突如として起つた射殺事件のことを思いだして、いやな気持になった。すると、どこやら遠くで、非常警けいてき笛の鳴るのをきいた、と思つた。

彼は階段の途中に立ちどまつた。

「ポ、ポ、ポ、ポツ」

ああ、警けいてき笛だ。紛まぎれもなく、上のぼり電車の警笛だ。次第次第に、

叫きようおん音は膨はれるように大きくなつてくるではないか。彼は墜ついら

落くするように階段を駆けくだつた。そのとき丁ちやうど度、叫きようかん喚怒どご

号うする人間を積んだ上り電車が、驀まっしぐら地にホームへ滑りこん

できたのだつた。

「やられたかッ」警部は呶鳴どなった。

「また若い婦人です」と車掌が窓から叫んだ。

「窓があいているじゃないか、あれほど言ったのに」警部は真赤になって憤慨した。

「エビス駅を出るときには閉っていたんです」

「よし、では乗客を禁足きんそくしとくんだぞ」

「わかりましたッ」

大江山警部は、若い婦人の屍体したいころがが転っているという二輛目の車輻の前へ、かけつけた。窓がパタリと開いて、多田刑事の泣いているような顔が出た。

「課長どの、殺されたのは赤星龍子です」

「えッ、赤星龍子が——」

総監から注意のあつたばかりの女が殺された。警部自身が大きい疑問符を五分ほど前にふつたその女が殺されたのだった。警部は車中へ入つてみた。

「課長どの」と多田刑事は警部をオズオズと呼んで、この車輛の一番先端部にあたる左側客席の隅すみを指さした。

「ここの隅ツ子に龍子が腰を下ろしていました。向い側の窓はたしかに閉つていたんですが、ビール会社の前あたりまで来たときに、そこにいた地方出身の爺じいさんが、窓をあけちまつたんです。

私が止めようとしたときにはもう遅うございました」

「君は一体どこに居たんだ」

「向うの入口（と彼は指を後部扉<sup>ドア</sup>へさしのべた）から龍子を監視していたのです」

「龍子は死んだか」そう云つて警部はうしろを向いた。彼女は軽<sup>け</sup>便担架<sup>いべんたんか</sup>の上で、裸にむかれていた。

「課長さん、重傷ですが、まだ生きています。創<sup>そう</sup>管<sup>かん</sup>は心臓<sup>かす</sup>を掠<sup>かす</sup>つて背中へむけています。カンフルで二三時間はもっているかも知れません」と医師が言つた。

「意識は恢<sup>かい</sup>復<sup>ふく</sup>しないかね」

「むずかしいと思いますが、兎<sup>と</sup>に角<sup>かく</sup>さつきから手当をしています」  
「輸血でもなんでもやつて、この女にもう一度意識を与えてやつてくれ」警部は、紙のように真白な赤星龍子の顔を祈るよう

てそう云った。

「多田君、田舎者の爺さんじいというの、どこに居るか」

「はア、そこに居ますが……」そう云つて多田刑事は車内の連中の顔をみまわしたが居なかつた。刑事は狼狽ろうばいして、一人一人を訊問じんもんした。その結果、仕切の小扉こドアをひらいて後の車へ行つたのを見たと言つた者がいた。驚いて後の車を尋ねてみたが、田舎者の爺さんなんか、誰も見たものがないというのだった。

「なに、どこにも見当らないって」その報告をきいた大江山警部は、鈍間とんまな刑事を殴りたおしたい衝動しょうどうに駆かられたのを、やつとのことで我慢した。

「課長どの、こういう方がお目にかかりたいと仰有おっしゃいますか」

と部下の一人が、一葉いちようの名刺を持って来た。とりあげてみると、

「私立探偵。帆村荘六」

大江山警部は、帆村の力を借りたい心と、まだ燃えのこる敵てきが懐心いしんとに挿はつて、例の「ううむ」を呻うなった。そのとき側かたわらに声があつた。

「大江山さん。総監閣下を通じてお願いしましたところ、お使い下さるお許しを得たそうでした。大変有難うございました」

「やあ、帆村君」警部は、青年探偵帆村荘六の和なごやかな眼をみた。事件の真只中まっただなかに入ってきたとは思われぬ温おん容ようだった。彼は帆村を使うことを許した覚えはなかったが、それは多分帆村探偵の心づかいだろうと悟つて、悪い気持はしなかった。

帆村探偵と大江山捜査課長とは、顔を近づけて、それから約二十分というものを、低<sup>ていせい</sup>声で協議をした。それが終わると、大江山警部の顔色は、急に生々と元気を恢復してきたように見えた。

「さあ、赤星龍子さんを、伝染病研究所の手術室へ送るんだ。ここから一番近くていい。それから私も、そっちの方へ行くから、用事があつたら電話をかけて貰いたい」

部下一同は呆<sup>あっけ</sup>気にとられたのだった。大江山課長は、今宵<sup>こよい</sup>三人の犠牲者を出したこの駅に、徹夜して頑張るのだらうと、誰もが思っていた。なんの面<sup>めんほく</sup>目があつてオメオメ此の現場を去ることができるのか。それに、電車はまだひっきりなしに通る筈だ。終電車までにまだ二時間もあるではないか。それを気に留めないで

引き払おうという課長の意が、なへん那邊にあるかを計りかねた一同だった。

頭の働く部下の一人は、こう考えた。

（課長が重症の赤星龍子について引上げるといふは、最早もはや今夜は犯罪が行われないことがわかつたのだ。なぜそれが確かになつたのであるか。——うん、もしかすると、赤星龍子が射たれたといふのは間違いで、彼女は、われとわが身体を傷きずつけたんじゃないやなかつたか。彼女の自殺！あの怖ろしい省線電車の射撃手は、実に赤星龍子だつたんだ。）

そう思つて眺めると、彼女を伝でん研けんの病室に送る一行の物々しさは、右の推す定ていを裏書うらがきするに充分だつた。

「赤星龍子はカンフルで持ち直して、うまくゆくと一命はとりとめるかもしれないということだ」

そんな噂が、伝研ゆきの自動車が出て行ったあとで、駅員たち  
の間に拡って行ったほどだった。果して龍子は助かるだろうか。  
のこる四人の容疑者の謎は、もうとけたのだろうか。

## 7

「大江山さん。手筈てはずはいいですか」

「すっかり貴方の仰おっしや有るとおり、やつといたです。帆村君」

ここは伝研の病室だった。伝研の構内には、昼間でも狸たぬきが出る

といわれる鬱うつそう蒼たる大森林にとりまかれ、あちこちにポツンポ

ツンと、ヒヨロヒヨロした建物が建っていた。今は、ましてや真

夜中に近い時刻であるので、構内は湖の底に沈んだように静かで、

霊れいこん魂こんのように夜気やきが窓硝子まどガラスを透とおして室内しんに浸しみこんでくるよ

うに思われた。

「では私の話をきいていただきましょう」帆村探偵はソツと別室ななかばの半開なつかかれた扉かを窺うかがうようにしてから、おもむろに口を開いた。

「射撃手事件は、並々の事件ではないのです。犯人は、飛行船を

組立てるように、なにからなにまで周しゅうとう到とうの注意ちゅういを払はらって事件

を計画しました。そこにはうっかり通りかかるとひっかからずには居られないかんせい陥穽せいや、飛びこむと再び外へ出られないような泥ど沼ぬまを用意して置いたのです。ひっかかったものが不運なんです。私も貴方あなた同様に手も足も出なくなるところでした、もし犯人が最後に演じた大きい失敗をのこして呉くれなかつたら。

第一から第三まで、三人の若い婦人の射殺は巧妙に遂とげられました。三人の射たれた箇所かしよは、完全に一致しています。貴方は弾たま丸まの飛来した方向を計算で出されたようですね。あれは大体事実と符合していますが、唯少ほせいし補正ほせいが必要なのです。それは、犯人が弾丸を車外から射ちこんだのではなくて、車内から射ったという点を補正すればよろしい」

「犯人は車内にいたというお考えですな」と警部は云つて、首を肯うなずかせた。

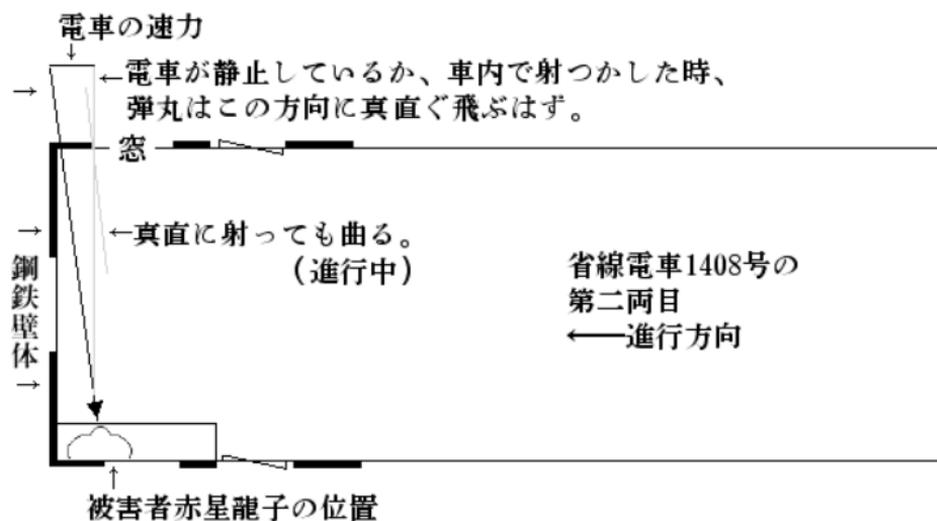
「犯人は車外から射撃したと思わせるためにいろんな注意を払っています。弾丸が向いの窓を通つたと思わせるために、被害者の前面には必ず空席をちよつと明けて置きました。射殺地点の一致は、車外に正確な器械があるのだと思わせるに役立ちました。被害者が十字架と髑髏どくろのついた標章マークを持っているということ、車内にいる犯人が犯行の直後に自ら標章を被害者のポケットにねじこんだものと考えられるのを、逆に車外の器械の正確さに結びつけることによつて考えをかき乱みだしました。兎とに角かく、薬やつきょう、莢えいを拾ぎおんわせたり、時にはタイヤをパンクさせて擬音ぎおんを利用したり、うま

くごまかしていましたが、最後に赤星龍子嬢の傷口きずぐちによつて一切のインチキは曝露ばくろしました。

龍子嬢は車輛の後方の隅に身体をもたせていました。彼女が正確に正面に向いていたことは始終眼をはなさなかつた多田刑事が保証してあります。彼女の向いの座席の窓まど枠わくは、鋼鉄車こうてつしゃのことですから向つて左端さたんから測はかつて十センチの幅はばの、内面に板を張つた縦たて長ながの壁となりそれから右へ四角い窓が開いています。もし車外から彼女の心臓を射つたとすると、この窓枠まどわくの縁ふちをスレスレに弾丸が通るはずですよ、彼は紙に書いた電車の図面の上へ鉛筆でいろんな線をひっぱつた。

しかしこれは電車が静止していたときの話で電車が若し五十キ

電車が動いている時は、車外から射った弾丸はこの方向に飛びこんで来るはず。



口の速度で左へ走っていたものとする、弾丸が向いの窓をとおつて被害者の胸に達するまではすこし時間がかかりますから、創きずぐち口はずつと右側へ寄り、恐らく右胸か又は右腕あたりに当ることになります。しかも赤星龍子嬢は心臓より反対に左によつた箇所を真正面から打たれているのですから、これは弾丸が、鋼鉄こうてつ板いたを打ち破り尚なおも物凄い勢いをもつて被害者の胸を刺すことにならねば出来ない相談です。無論、現場げんじょうをしらべてみると、鋼鉄板に孔あながあいているどころか、弾丸の当つたあともありません。明らかにこれは車内で弾丸を射つた証拠しょうこです。車内で射つたという条件がきまると問題は大変簡単になります。車外の出来ごとことごとは悉く問題の外ほかに置いていいのです」

そう云つて帆村探偵はちよつと言葉をきつた。

「なるほど面白い推理ですね」と大江山警部は大きく頭をふつて云つた。「すると犯人の名は……」

と云いかけたところへ、けたたましい警笛けいてきひびきの響がして、自動車自動車が病舎の玄関まで来てピタリと止つた様子だった。やがて廊下をパタパタと登音がすると、病室の扉ドアにコトコトとノックがきこえた。帆村探偵が席を立つて開けてみると、多田刑事が笹木光吉を連れて立つていた。

「課長どの、すっかり種をあげてきました」と多田は晴やかに笑顔を顔を作った。「これです、消音式しょうおんしきで無発光のピストルなんです。笹木邸のおおげやき大櫓ほらあなの洞穴ほらあなに仕かけてあつたんです」とい

て真黒な茶筒ちやづつのようなものを、ズシリと机の上に置いた。

大江山警部が茶筒をあけてみると、内部には果して一いつちよう挺たいの

ピストルが入っていた。弾丸をぬき出してみると、確かに口径こうけい

四・五センチだ。ピストルの内部を開いて螺旋溝らせんこうの寸法デイメンション

を顕微鏡けんびきようで測ってみると、兼ねて押収して置いた被害者達の体

内をくぐった弾丸の溝跡こうせきの寸法と完全に一致した。

「ではこのピストルは、笹木君のか」警部はきいた。

「私ござのでは御座いません」

「いえ、課長どの。この男が赤星龍子に殺意を持っていたことは

確かなんです。この手紙をみて下さい」そう云つてる多田は、龍

子から笹木にあてた手紙の束たばをさし出した。それを読んでみると、

このところ両人の関係が、非常に危<sup>きたい</sup>に瀕<sup>ひん</sup>しているのが、よく判った。

笹木光吉は不<sup>ふ</sup>貞<sup>てい</sup>不<sup>ぶ</sup>貞<sup>てい</sup>しく無言だった。大江山警部はこの場の有様と、帆村探偵の結論が大分喰いちがっているのを不<sup>ふ</sup>審<sup>しん</sup>がる様子でチラリと帆村探偵の顔色を窺<sup>うかが</sup>った。

「そのピストルは犯人が直接に用いたピストルと違っています」  
帆村はピストルを調べたのち静かに言った。

「<sup>みぞあと</sup>溝跡までが同じであるのに、違うというんですか」警部は、すこし冷笑を浮べて云った。

「そうです」帆村はキツパリ答えた。「これも犯人のトリックです。犯人はピストルの弾丸<sup>だんがん</sup>には人間で言えば指紋のようにピスト

ル独特の溝跡こうせきがつくこと位よく知っていたのです。彼はそこを  
ごまかすために、多田さんが唯今お持ちになったピストルを、軟  
い地面に向けて射った後、土地を掘りかえして弾丸だんがんを掘りだした  
んです。犯人は、こうしてピストル特有の溝跡がついた弾丸を、  
又別またに持っている無螺旋むらっせんのピストル、それは多分、上等の玩具がんぐ。ピ  
ストルを改造したんだろうと思われませんが、その別なピストルに  
入れて、省線電車の中に持ちこんだんです。よく調べてごらんな  
さい。屍体しかいの中から抜きとった弾丸には、葉莖にとめるときにつ  
いた鍵かぎ裂さけの傷がついています」

大江山警部は、この執念ぶかい犯人のトリツクに、唯々ただただあき呆れ  
るばかりだった。

「すると真犯人は玩具ピストルに、この弾丸を籠めたのを持って  
いるんですね。笹木君は犯人ではないのですか」

「笹木君ではありません」と帆村が言下に答えた。

「では犯人の名は……」

その瞬間だった。

「ガチャリツ」と硝子の破れる音が隣室ですると、屋根から窓

下にガラガラツと大きな物音をさせて墜落したものがあつた。ソ

レツというので一同は扉を押し開いて隣室に飛びこんだ。

「呀ッ」

一同はその場に立ちすくんだ。

真正面の大きい窓硝子が滅茶滅茶に壊れて、ポツカリ異様な大

おあな  
孔が出来、鉄格子が肋骨のように露出していた。その窓の下に寝台があつて、その上に寝ているのは重症の赤星龍子だった。ああしかし無惨なことに、龍子の胸から下を蔽った白い病衣のその胸板にあたる箇所には、蜂の巣のように孔があき、その底の方から静かに真紅な血潮が湧きだしてくるのだった。この場の光景は、何者かが窓外にしるのびより、寝ている龍子に銃丸の雨を降らしたことを物語っていた。射つたのは誰だ。

「帆村さん、とうとう掴えましたよ」

格子の外に近付いた人の顔がある。それは白い記者手帳を片手にもった東京××新聞の記者風間八十兒だった。その後には雁字搦めに縛られた男が、大勢の刑事に守られて立っていた。

それは捜査課長に馴染なじみの深い探偵小説家を名乗る戸浪三四郎の  
 憔悴しょうすいした姿だった。

「帆村さん。お駄賃だちんにちよつと返事をして下さい」と風間記者は  
 鉛筆を舐め舐め格子の間から顔をあげた。

「真犯人しんはんじん戸浪三四郎は、目立たぬ爺おやじに変装したり、美人に衆しゅう  
 人の注意を集めその蔭にかくれて犯罪を重ねた、いいですね」

帆村は軽くうなずいた。

「戸浪三四郎が目星をつけて置いた掩護物えんごぶつは片方の耳の悪い美  
 女赤星龍子だった。龍子の隣りに席をとった彼は消音ピストルを  
 発射して巧みにごまかした。ところが龍子の聴力は余程恢よほどかいふく復し  
 ていたので、とうとう龍子に犯行を感付かれた。そこで彼は殺意

を生じたが、マンマとやり損じた。いいですね、帆村さん。

ええと、それから、龍子は重症だが、一命をとりとめると噂が耳に入ったので、戸浪三四郎は彼女の跡を追って伝研でんけんの病室へ忍び入り、機会を待った。チャンスが来た。寝ている龍子の心臓のあたりをポンポン打った。イヤ消音しょうおんピストルだからプスプス射ったというんですね、そこを待ち構えていた刑事諸君の手でつかまっちゃまった。僕の手柄は手前味噌てまえみそですから書きません。無論戸浪が犯行につかったインチキ・ピストルも発見せられた。いいですね、帆村さん。

うまく龍子を射殺したと思ったのは戸浪の思いちがいだった。龍子は目黒駅に居るとき死んでいたのだった。生きているよう

な噂が拡がったのは、犯人をおびき寄せるため帆村探偵の案あんしゆ

出っした手だった。戸浪は、探偵小説家の名を汚けがし、彼の変態的

な純情(?)に殉じゆんじた、とでも結んで置きますか、ねえ帆村さん」

帆村は静かに笑った。「戸浪君は車内ではピストルをどこに隠してたか……」

「ああ、それを忘れちゃつちや、お手柄がなんにもならないな。

エエと、戸浪はピストルの口を、上衣の右ポケットの底穴のぞから覗かせて射つたため、僕の外には誰も気がつかなかつた、というのはどうでしょう」



# 青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第1巻 遺言状放送」三一書房

1990（平成2）年10月15日第1版第1刷発行

初出：「新青年」博文館

1931（昭和6）年10月号

入力：tatsuki

校正：土屋隆

2004年11月8日作成

2013年2月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 省線電車の射撃手

海野十三

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>